

# 月曜評論

日中両国の国交が樹立してから一月が過ぎた。田中内閣の出現以来、急激に高まった「日中友好」ムードも一段落し、政界は間近に迫った解散・総選挙に向けて、徐々に冷静化しつつあるようだ。「日中」そして総選挙への期待が高まりつつある。

今日、中国の社会的・文化的地位を十分に考慮した選択が必要かどうかである。

政府界の一部にみられる「夢」

激動をよやく收拾したばかりであり、「林彪異変」にみられる政治的緊張をわずか一年前に経験したばかりの国なのである。また、広範な民衆が動揺

人奴といつた問題は、大変好ましい。ほほえましいことであるが、一方、文化接触の次元の問題では、とくに慎重な考慮がなされねばならないであろう。

中国の革命期が今後も特制的に日本に紹介されようとした場合、わが国の、とくに若い世代に「中国誇り」を生みだすはしないかという懸念にもつながるが、それ以上に、わが国の側からする対中国文化交流においては、深く検討を要する問題だと見えるだろう。

この感で、国交樹立後の最初

それだけに、日本人とは違って、中国人の眼(め)には、むしろ、まさにエゴニミック・アニマルの象徴のような操の巨体の力技としてのみ映し、ある種の「拒絶反応」と反響を覚えることになったら大変である。

## 日中文化交流の視点

と云々思われるようなものが「日本株式会社」の馬車馬の現状にいまさらながら驚かされる昨今ではある。

よき一度「式」の中国市場論がいかにか危険な対応であるかについてはいまさら驚かされる昨今ではある。

そのようなとき、国交樹立後の日中接触に関しては、わが国の側ができるだけ柔軟な態度を持てるのが必要であろう。

画民族の均質的來源にもかかわらず、今日では、とくに文化的にきわめて興衰であつて、この私にはさか不安である。たしかに、大相撲はわが国の伝統的則・無記層であったならば、当面は双方の物めすらしから問題はないにしても、わが国は文化摩擦(カルチュラル・コンフリクト)を招きかねない。

この問題は、「日中」の象徴的な文化交流の試みが大相撲とどりあけられたことに、私にはさか不安である。たしかに、大相撲はわが国の伝統的則・無記層であったならば、当面は双方の物めすらしから問題はないにしても、わが国は文化摩擦(カルチュラル・コンフリクト)を招きかねない。

異質な対象ではなからうか。大相撲の派遣が興行的な成功とすらほらに、中国民衆の「拒絶反応」に出会うとはないかどうか、私の心配が杞憂(きゆう)であろう。それは争いである。

それは争いである。中国は本来、儒教的倫理感のゆえに、裸体に対してはきわめて禁欲的であつた。だから、日本の中興の時期であつたといえ、かつて戦時中の大相撲中国旅行が、当時の中国人には決してよい印象を与えなかつた記録も残っているだけに、今回はその辺の事情も十分に考慮して、周到な準備を重ねてほしいと思う。



中嶋 嶺雄

(東京大助教授)